

## 二度の変身

羽 田 正

人生は意のままにならない。歩いていると思いがけないことが起きて周囲の景色がすっかり変わり、行き先を変えねばならないことがある。研究者の人生は正にそうではないだろうか。少なくとも、私の場合、若い時にこれと思い定めた道を今日までまっすぐに進んできたのではない。遠い世界で生じた出来事によって、歩く道を大きく変えざるをえないことが何度かあった。周囲の状況を見て、研究テーマを柔軟に変えてゆくことを、研究者はときに求められる。*Odysseus* に寄稿を求められたこの機会に、地域研究とのかわりを軸に、私の個人的な体験を書き留めておこう。

幼いころからなぜか歴史の本を読むのが好きだった私は、大学に入学する頃にはすでに漠然とだが歴史の研究を志していた。西洋諸国や日本ではなく、アジアの歴史研究に関心を持つようになった理由は、よく分からない。若いころは「家の学問だからでしょう？」と問われることがしばしばあり、いやな気分がしてよく反論したものだが<sup>1)</sup>、今は反抗心がなくなり、そういうものなのかもしれないと思う。

私は、京都大学文学部の西南アジア史学研究室を卒業後、希望通り、大学院の修士課程を経てそのまま博士後期課程まで進んだ。研究テーマは、16–18世紀にイラン高原とその周辺を統治したサファヴィー朝政権の政治・制度史だった。西南アジア史学の研究室では、まず史料を読むこと、それも現地語の史料を正確に読むことが求められた。史料を読んでいるうちに問題意識が生まれるのだと先生方や先輩から繰り返し教えられ、私はひたすらペルシア語の史料を読んだ。当時、京都で手に入る限られた数のペルシア語史料のほとんどはサファヴィー朝宮廷で記された年代記類であり、それらを読み進めるうちに、このようなテーマに関心を持つようになったのは自然の流れだった。現代についての関心があって研究テーマが決まったのではなく、史料を読んでいるうちに文献史的なテーマが見つかったのである。

とはいえ、イランの過去を調べているのだからイランに行ってみたいと思うのもまた自然だった。私は初めての海外旅行の行き先にイランを選んだ。1978年8月、博士課程に入って2年目のことである。私が修士課程の学生だった時に京都にしばらく滞在されたのでよく知っていたテヘラン大学の Iraj Afshar 先生を訪ねたところ、当時図書館長を

務めていらっしやった先生は、その場で私のイラン滞在中の奨学金を手配して下さり、本格的にイランに留学したらどうかと勧めて下さった。私はこの話をありがたくお受けし、一旦日本に戻って、イラン留学のための準備を始めることにした。

ところが、それから半年も経たないうちに、イラン革命がおこった。私がイランに滞在している間も町でデモが行われてはいたが、強大に見えた王政がそう簡単に倒れるとは予想できなかった。現在とは異なり、通信や連絡手段が限られていた当時、イランやテヘランの状況は日本ではよく分からなかった。断片的に伝えられる報道による限り、留学しても学業がまともに行えるとは思えなかった。そのうち、Afshar 先生が大学から追放されたとの情報が知人から届き、私はイラン留学をあきらめた。自然に見えた道は、突然閉ざされたのである。

といっても、京都にとどまっていたら研究は先に進まない。そこで、世界的に著名なイラン史の大家である Jean Aubin 先生の指導を仰ぐために、フランスに留学することにした。1980 年秋、フランス政府の奨学金を得てパリに着き、所属したパリ第 3 大学で、私は、「歴史学」ではなく「イラン学」の学生となった。当時まだ健在だった 19 世紀以来のヨーロッパにおける学問体系では、歴史学とはヨーロッパの過去を理解するための学問であり、非ヨーロッパ、とくにアジアに関する人文的研究は、すべて東洋学 (Etudes orientales) という枠組みに組み込まれていた。その一部としてイラン学があった。といっても、文献を徹底的に読み込むという点において、京大の西南アジア史学とパリ第 3 大のイラン学の姿勢や方法に大きな違いはなく、私はパリで教えを乞うた先生方<sup>2)</sup>の研究にそれほど違和感を持たなかった。むしろ、世界レベルの研究の広さと深さに感動を覚えた。結局、2 年 8 か月パリに滞在して博士論文を書き終え、私は「イラン学博士号 (Doctorat de 3e cycle en études iraniennes)」を得た。

もしあの時にイラン革命が起こっていなかったらと時々考える。私はおそらくテヘランに留学し、ペルシア語の運用能力を身につけ、現代イランの政治や社会にもそれなりの知識を得て、イラン研究の専門家になっていただろう。単なる文献学者ではなく、地域研究とも接点を持つイラン史研究者である。しかし、パリに留学したために、イラン学で博士号を得たとはいえ、私は胸を張って自分のことをイラン研究者だとは言えなかった。ペルシア語をそこそこ読むことはできても、満足に話はできない。イランの歴史についてある程度は知っているが、現代イランに関する知識はごく限られている。これでは地域研究者として落第である。その私が、アジア地域研究の拠点を標榜する東京大学東洋文化研究所に勤務し、さらに総合文化研究科の地域文化研究専攻で授業を担当することになったのだから皮肉なものである。

1989 年、東京大学に赴任すると、そこでは板垣雄三先生が主宰する「イスラームの都市性」という一大共同研究プロジェクトが、東文研を事務局として展開されていた。事務局員の一人となった私は、人類学、政治学、経済学、宗教学、社会学、それに地域研

究など、それまではほとんど接点のなかった研究分野を代表する研究者たちが出席する研究会に、いやでも出てゆかねばならなくなった。さらに、総合文化研究科地域文化研究専攻の諸会議では、英・仏・独やラテンアメリカ研究など多彩な分野のすぐれた専門家とお話する機会が生まれた。フランス留学時代も含めて、東洋学、文献史学の狭い領域にどっぷりと浸かっていた私にとって、これはまったく新しい環境であり、周囲の景色は大きく変わった。新鮮ではあるが果たして適応できるのか、ずいぶん不安に感じたことをよく覚えている。

しかし、この新しい環境が私に与えた影響は大きかった。私はこれから地域研究を専門にするのだという意識が、自然に芽生えてきたからである。実際に、他の研究分野の専門家との交流から得るものは大きく、研究会や会議での彼らとの知的な会話は掛け値なく楽しかった。「イスラームの都市性」プロジェクトのおかげで、東京にほとんど知人のいなかった私は、得難い友人を何人も得た。このプロジェクトには本当に感謝している。地域を理解するためには文献を読んでいるだけでは不十分だと知り、科研費の補助を得て、イランのみならず中東や北アフリカの各地を都市と建物の調査で毎夏歩き回ったのは1990年代のことである。中東諸地域についての土地鑑がある程度身に付き、現地の人々への共感と愛着も自然と身についていった。

1997年春からは、人文社会系研究科の佐藤次高先生を責任者とする新たな大型共同研究プロジェクト「イスラーム地域研究」が始まり、私は一つの研究班を任された。このプロジェクトはイスラーム的な地域研究でもイスラーム地域の研究でもないとおっしゃる佐藤先生のリーダーシップの下で、私はそれが正確に定義できないにせよ、イスラーム地域の研究に取り組み、イスラーム世界という地域の専門家を自認するようになった。大学での講義や一般向けの講演では、イスラーム教は「怖い」「分からない」「厳格だ」という言説は間違っている、イスラーム教は柔軟な宗教だ、イスラーム教は美しい建築や美術の作品を数多く生み出しているなどと、イスラーム教とその文化を積極的に評価して学生や一般の人々に伝えることを心がけていた。地域の側に立って地域を理解し説明することが、地域研究者の基本的な態度だと信じていたからである。

そんな時に発生したのが、2001年9月11日の同時多発テロだった。事件そのものもだが、このテロの直後に日本はもちろん世界各地で生じた強烈なイスラーム教とムスリムへのバッシングは、私にとって大変なショックだった。あらゆるメディアがイスラーム教とムスリムの危険性や特異性を強調し、煽り立てた。イスラーム教とムスリムを擁護するどんな説明も通じそうになかった。私は、ムスリムの側に立って、彼らの社会や文化を日本の人々に好意的に伝えようとしてきた私の努力がいかに空しいものだったかを思い知った。茫然と時を過ごしながら、自分自身の研究の意味と価値について再考する日々が続いた。またしても、目の前に開けていた景色が変わったのである。

「私が実際に現地を訪れて出会い話したムスリムは、優しく穏やかで私と多くの価値を

共有していた。決してパッシングを受けるような人々ではない。なのに、なぜ、イスラーム教とムスリムは、これほどまでに激しく批判され、差別されるのだろうか。」これが当時私が抱いた根本的な疑問だった。そこから「イスラーム世界」という概念の持つ恣意性に気づき、その概念が19世紀の西ヨーロッパで生まれ、普及し、世界の情勢と連動しながら日本語に入り込み定着するまでの過程を文献学的に明らかにした『イスラーム世界の創造』（東京大学出版会、2005年）という研究成果が生まれた。

もし同時多発テロが起こらなければ、私は自分の研究する「イスラーム世界」の存在を疑わず、この地域と日本をつなぐことを自らの役割と信じて、そのための活動を続けていたに違いない。しかし、9.11とその後の世界の風景は、私の研究の方向を根本的に変えた。私は、世界の政治や経済の情勢とそれを背景にして生まれる知と世界観によってある地域空間の概念が創造されること、また、ある地域はその外側と切り離され独立して単独で存在しているのではないことに気づいた<sup>3)</sup>。気づくのが遅いと言われればそれまでである。しかし、これ以後、私は、ある地域を理解しようとするなら、その地域だけに焦点を絞るのではなく、常に世界全体の情勢に目配りしなければならないと考えようになった。地域は不変ではない。時代によってその形を変えながら、互いにつながり、重なり合って全体として一つの世界を構成している。世界全体を視野に入れてはじめて、ある地域の動きや特徴が見えるのである。

この点で、国や地域の存在を自明とし、それらの時系列に沿った歴史をたばねた現行の世界史の理解と叙述に問題があることは明らかである。これは20世紀半ば過ぎ、主権国民国家が世界各地に次々と作られていった頃の世界認識を基礎として形成された世界史叙述である。かくして、2005年の『イスラーム世界の創造』刊行以後、私はイラン史とイスラーム世界研究の専門家を廃業し、新しい世界史の理解と叙述の方法という新たなテーマに取り組むことになる。それは難しいが挑戦し甲斐のあるテーマである。ちょうど、グローバルヒストリーという歴史研究の新しい潮流が、世界各地ではっきりと姿を現してきた時期だった。『新しい世界史へ』（岩波新書、2011年）、『グローバル化と世界史』（東京大学出版会、2018年）、それにグローバルヒストリー関連の何冊かの編著<sup>4)</sup>を出版し、ここ数年は世界各地のグローバルヒストリー研究者たちとの共同研究を活発に展開している<sup>5)</sup>。この10年ほどの研究によって、方法についてはある程度見通しがついていた。しかし、実際にその方法を用いて世界史を描いてみる作業がまだ残っている。道はまだ半ばである。

このように整理して振り返ってみると、私は研究者として二度大きな変身をとげていることが分かる。一度目が文献史学者から地域研究者へ、二度目は地域研究者から世界史研究者への変身である。それまでの研究が一段落し、必然的に次の段階に進んだからだとは必ずしも言えない。二度とも、私自身の意思とは直接関係のない遠い場所で起こっ

た出来事が、研究者としての私の歩む道を変えたのである。もしかすると、現在私が確信をもって進んでいる世界史研究の道も突然閉ざされ、新たに別の道を探さねばならなくなるのかもしれない。しかし、その時には、これまでと同じように、自分の研究の意味を真剣に考えれば、また別の道が見つかるだろう。それまでは、遠くに見える「新しい世界史」という目標に向かう現在の道を、着実に歩み続けてゆくことにしたい。

## 注

- 1) 私の祖父である羽田亨(1882-1955)は、中央アジア・西域史の研究者であり、伯父の羽田明(1910-1989)もまた中央アジア史の研究者だった。しかし、父は会社員であり、母は学者嫌いだったので、家に歴史関連書籍はまったたくなく、学問が話題になることもなかった。家庭環境によって私が歴史学者を志したとは思えない。
- 2) 私は Aubin 先生(1927-97)のほかにも、Jean Calmard 先生(1931-2017)に特にお世話になった。Calmard 先生の思い出は、以下の文章を参照頂きたい。Haneda Masashi, “Jean Calmard (1931-2017)”, *Iranian Studies*, 51-4 (2018), pp. 659-661.
- 3) この点は、地域文化研究のフランス科の先生方と行った何度かの議論が大いに参考になった。議論の成果は論文集となって出版されている。石井洋二郎・工藤庸子編『フランスとその〈外部〉』東京大学出版会、2004年。
- 4) 『グローバルヒストリーと東アジア史』(東京大学出版会、2016年)、『グローバル・ヒストリーの可能性』(山川出版社、2017年)、『地域史と世界史』(ミネルヴァ書房、2017年)など。
- 5) 注4の『グローバル・ヒストリーの可能性』は、彼らとの研究成果の一つである。その他の外国語での著書・論文や共同研究の報告については、以下のウェブサイトをご覧頂きたい：<http://coretocore.ioc.u-tokyo.ac.jp/>